

# 宗岡二中だより 2月号



令和8年2月2日

自ら学び考える生徒

学校教育目標：心豊かな優しい生徒

明るく元気な生徒

## 情けは人の為ならず、巡り巡って己が為。

校長 伊藤大輔

二月は逃げ月。他の月よりも日数が少ない分、計画的に物事を進めたい時期です。一瞬一瞬をこれまで以上に大切に過ごしてほしい時期です。そして仕上げの時期です。ここまでの自分を形作った自分の頑張り、さらには周りから受けた優しさを思い起こして、力を蓄える時期です。

先日開いた会議の場で関係者の皆様方から「言葉・笑顔・挨拶」はじめ宗岡二中生の良さや底力を評価いただきました。素直に有難いと思いました。そして応援して下さる方々の恩恵(おんけい)に報いる宗岡二中にしていきたいと改めて思いました。

さて、人から受けた恩について作家の井上ひさし氏の体験談を紹介します。氏は十五歳の時、岩手県一関市の本屋に入って、こっそり国語辞典を持ち出そうとしたそうです。いわゆる万引きです。店番をしていたおばあさんがそれを見つけます。ひさしを店の裏手に連れていき、薪割りをさせます。ひさしは罰(ばつ)だと思ったそうです。しかし、薪割りが済むと、おばあさんは国語辞典をくれるというのです。「働けばこうやって買えるのだよ」と言って、辞書代を差し引いた労賃までくれました。作家になったひさしは「おばあさんは、私に誠実に生きることの意味を教えてくれた。いくら返しても返しきれない大きな恩」と回想します。相手に喜びを与えることで、その喜びが返ってくることを伝える話です。

このように誰かから受けた恩や親切を、それを発した人に返すことを恩返しと言います。恩を受けた相手に感謝を伝える行いです。受け取った優しさを発信した相手に返せば良いのですが、時には叶わないこともあります。井上ひさし氏が述べているよ

うに「いくら返しても返しきれない」こともあります。そこで誰かから受けた優しさを他の誰かに渡してみます。つまり意図して、返さずに渡すのです。これを恩送りと言います。感謝を広げる行いです。恩返しも恩送りも、感謝を具体的な形に変える行いです。

人は誰も、誰かの支えや優しさに助けられながら生きています。大きな出来事かもしれませんし、ほんの小さな一言かもしれません。忙しいときに差し出された手助け、ふとした笑顔、ねぎらいや励ましの言葉など、学校の日常にも優しさが交流する場面があるはずです。皆さんには、その瞬間に浮かぶ心の変化に耳を傾け、その声を起点に何かを実践する人であって欲しいと思えます。

「自分の教室、机、椅子などを綺麗に、そして丁寧に扱う。」「後輩や新入生に自分が受けた以上に親切に接する。」「授業の内容にかかわらず、これまでの学びに磨きをかけ、社会に貢献する。」など具体的な行動を起こしてみませんか。こうした行動は自分を育てる根になると私は思います。

標題のことわざは「情け(優しさ)は人のためではなく、いずれは巡って自分に返ってくる。だから誰にも親切に接しましょう。」という教えです。そもそも情けをかけた相手も救われますので、本来は「情けは人のためになり、情けは自分のためになる」のです。そして、最初から「こんなにしてあげているのだから・・・」と相手からの見返りを求める情けは、誰のためにもなりません。「こんなにしていただいて」と感謝を受け止め、自分を育てようと発信する情けこそ、誰かのためになるはずです。ゴールが射程に入る今こそ、焦らず丁寧に毎日を過ごしましょう。